

ヒュームにおける想像と記憶のちがいについて

川 端 康 司

序

その昔、アメリカ西部にひとりの有能な保安官がいた。幼少のころより、とくに数学的な才覚があり、しかも射撃の腕前は横に並ぶものがないといわれていた。あるとき保安官は強盗の一味を追って町にある酒場へとやってきたのである。酒場のホールは楕円の形をしており、屋根もドーム形のいわば幾何学的なものであった。なかでは、強盗の一味がひとつの丸テーブルをかこんでヒソヒソと何やら話をしていた。スタンディング・テーブルに居合わせた保安官は、かれらが興味のある場所にすわっているのをみて、それと対称的な席に移り、ひとり考えごとをしているかのように腕組みをして目をつむった。それから数日後、保安官はやすやすとこの連中を一網打尽に捕えたのである。そして、町の人々の前でこういった。「わたしは酒場で連中の話をすべて盗み聴きました。どうしてそのようなことができるのかとおっしゃるだろうが、それはつまり、この酒場は楕円の形をしていて、連中はその楕円の焦点のひとつにあたる場所で話をしていたのであり、しかも、わたしはもう一方の焦点にあたる場所で耳をすましていたというわけである。」

この保安官はすくなくとも楕円における焦点の性質を理解していたことがわかる。いいかえれば、ある楕円体の内側に鏡をはりつめ、一方の焦点に光源をおくともう一方の焦点にその光が集まると同様、音源を一方の焦点におくともう一方の焦点にその音が集まるといふ楕円の性質を保安官は利用したのである。ここで肝心なのは、一方の焦点、すなわち連中が密談していた地点では、いつどこでどのような犯行をおこなうかという事実が語られていたという点であり、それに対し、もう一方の焦点、すなわち保安官が盗み聴きしていた地点では、連中の談話によっていちど放射された事実が言葉を通して再びここに集まってくる、ということである。しかしながら、ここに再び集まった事実生き生きとした直接的事実でない。この地点では、言語化された観念が受け取られ、そこで密談の内容が再構成されるのである。

ところで、われわれの認識は外界の实在を問題にしなければつぎのようにして成立する。まず、感官が刺激されると同時にわれわれの心のうちにしるしが与えられる。だからわれわれは過去の出来事を思い出すことができるのである。しかし、われわれの知覚はいま現在、この過去の出来事全体を一枚板のように、そっくりそのまま思い起すことができない。実際、われわれは出来事をただ断片的な繋がりととしてしか思い出していないのである。したがって、一連の過去の出来事を思い出せるようにするためには、もう一方の焦点にいた保安官が聞こえてくる会話の断片を集めたように、われわれはおのおのの出来事を再構成する必要がある。そして、それらを再構成することによって下される判断の準備をしなければならぬ。いいかえれば、強盗一味が行おうとしている犯行がどのようなものであるかを予想し、かれらを逮捕する準備をしなければならぬ。このような再構成と判断の準備を演じるのが「想像」の役目なのである。

以上、二つの焦点によって記憶と想像という機能を比喩的に表したわけであるが、これら焦点のたとえていながらがもう一つある。それは、二つの焦点のうちどちらが記憶であり想像であるのかということが固定できないのと

同様に、記憶と想像は初めから、それぞれ独自の機能をもつという根拠によつては明確に区別できない、ということである。少なくとも、われわれがふだん考えたり言葉として使っている記憶や想像という概念は、特定の事実と結びついた名であり、しかもその事実によつてなんらかの働きを想定しかつて代表するための名にすぎない。たとえば、記憶術や空想力という言葉によつて私はそのような能力にすぐれた特定の人を知っているVといわれる場合や、暗記という言葉によつて私は中学時代に二次方程式の解の公式を暗記したVといわれる場合などがそうである。このことをふまえたうえで記憶や想像の働きの考察される必要がある。そこでわれわれは、十八世紀の人、デイヴィッド・ヒュームにたちもどらねばならないのである。

一 本論の主旨

そもそも、過去の出来事を思い出すとき、われわれは正確にそれを内印象の領域に再現することができない。このことは明白である。過去の出来事に付随しているかつての感情のことを考えれば、とくにそのことはよくわかる。したがつて、かつては印象であつたが現在では観念であるような出来事事件は、観念の領域にある想像と関連しながら、習慣によつて再生されなければならない、とするヒュームの見解は正しいと思われる。というのも、記憶は「記憶された内容」であるだけでなく「思い出すこと」でもあり、しかも思い出すことや回想は過去における恒常的連接 (constant conjunction) がなければ成立しない、とかは主張するからである。また、恒常的連接は想像における観念連想によつて成立するとされる。このことから、 \wedge 想像と記憶はどのように区別されるのかVということが問題となる。しかし、直接経験されない想像の働きそのものの考察から出発したり、その働きを定立したうえでの議論を展開することは、抽象的であるから無意味に等しい。したがつて、われわれはかれの想像と記憶に関する考察

をすすめてゆくうえで、直接経験されることがらより着手しなければならない。ところで、ヒュームは記憶と想像のちがいを活気の優劣に認める。つまり、記憶が想像よりも勢いと活気の点で優れていると考えるのである。これは可感的なちがいであるからわれわれの経験と観察にもとづいたものである。また、このちがいは印象と観念のちがいに関連している。ヒュームは知覚を印象と観念に分け、両者のちがいを「勢い (force)」や「生氣 (liveliness)」、「活気 (vivacity)」の程度にあるとする¹⁰⁾。印象は勢いと活気をもっており、観念はその点で劣っているのである。したがって、感受性の点で、記憶は印象に近く、想像は観念に近いといえる。さらに、記憶は原印象および内印象とのむすびつきが強いといえる。逆にいえばこのことは、想像が両印象と直接的な関わりをもっていないと明確でない、ということである。このことから、想像は観念を中心にその役割を演じることが明らかとなる。そこで、想像は観念とどのように関わっているのか、さらに、人想像観念における活気の弱さがなにを意味するのか¹¹⁾が問題となる。それゆえ以下では、最初に記憶と想像のちがいを考察し、両者が可感性の点以外では明確に区別できないことを明らかにする。第三章以降では想像を中心に論じる。まず、想像が複雑観念であることを予め明示しておく。つぎに、想像観念はどのように形成されるのかを第二章にわたって述べる。つまり、第四章では観念結合の可能性としての想像の働きについて、第五章では観念連合としての想像の働きについて考察する。観念連合で重要な因果関係と、因果推論に不可欠な恒常的連接とを第六章で論じ、その時点で、記憶と想像の固有の働きは明確に区別できないということが明らかとなろう。

二 記憶と想像のちがい

まずヒュームにおいては、さきほど述べたように印象はいきいきとしており観念はその点でおとっているというこ

とが明白である。ではこのちがいはなにをあらわしているのか。勢いや生氣、活気があるということとはわれわれの心に現われていて直接に経験されているということの意味する。このことはだれによっても疑われえない自明のことである。なぜなら、外的事物や自己の存在を疑おうと疑うまいと、われわれ人間は生きているので、感覚を否定することはできないからである。このように、勢いや活気によって特徴づけられている対象ないし事物の印象は、直接経験によってわれわれにはっきりと感じられるのであるから確立ないし確定されている。したがって、印象によって示されることからは、われわれのうちはその意味が確定されているのである。それに対し、觀念によって示されることがらは、あまりはっきりと感じられないからその意味は不明瞭であり確定されていないのである。

ところで、『人性論』におけるヒュームはまず、第一巻第一部第三節で記憶と想像のちがいを二つあげる⁸⁾。第一に、記憶が「觀念の順序と位置を保存する」のに対し想像は觀念を自由に「模様替えできる」というちがいである。第二に、記憶が勢いと活気の点で想像よりすぐれているというちがいである。しかし、ヒュームはのちに同第三部第五節でこの第一のちがいをしりぞけ、「勢いと活気の程度において記憶が想像よりすぐれている」という第二のちがいのみを主張する⁹⁾。これらの叙述からつぎの二つのことが問題となる。つまり、それは△なぜ、ヒュームは第一のちがいをしりぞけ第二のちがいを主張したのか▽ということ、△勢いと活気の優劣という第二のちがいによって、ヒュームはいつたいなにを主張しようとしているのか▽ということである。第一の問題から検討しよう。まず、このことによつてヒュームが記憶と想像の区別をあまり問題にしていないといっているのではない。むしろヒュームは、通常考えられているちがいや定義上認められてきた第一のちがいを、いくつかの例外をあげて退けることにより、経験上、記憶と想像はかならずしも明確に区別できないが、しかしただ一つ、活気の優劣において区別できると論じているのである。たとえば、「ある男が過去の冒険談を語るさい或る場面を作り上げて空想をもてあそぶかもしれない。このとき、もし想像觀念が淡くなく曖昧でないとするれば、この空想をそれに似た種類の想起と区別する可能性は少しもな

いであろう。」⁶⁾ 一つめの文は、記憶が各単純観念の順序と位置を保存し、想像がそれら観念の固定された順序と位置をおもいうまみに変えることができる、という特性にそぐわない例である。過去の冒険談を語ることは、これまで順序正しく配列されてきた過去の出来事・事実を記憶の働きをもちいて忠実に思い出すことである。しかし、この男は、その冒険談とは別のもの、たとえばそれより以前の子どものころに読んだ英雄伝と結びつけて語っているのかもしれないのである。それが意識的であるか無意識になされたのかはわからない。そのほうが聞き手に共感を与えられたのかもしれない。いずれにせよ問題は、彼が第一のちがいであげた記憶の特性をこの場合に適用できないということである。なぜなら、記憶は出来事観念の順序・位置を保存しているので、回想されるさいそれらは忠実に再現されてしかるべきであるにもかかわらず、この男の場合では、そのときの観念とは別の観念が回想に混入されているからである。したがって、記憶に関するこの定義は一般的に成立しないことになり、また、この定義によって記憶と想像を区別することは完全な決め手にならないのである。さらに、上の例からヒュームの論法をみることにしよう。二つめの文が反事実的条件法であることは明白である。想像は淡くていきいきしていないという事実にもかかわらず、△想像が淡くなく曖昧でない▽という前件は、反事実的な仮定である。しかも、後件の意味することがらはその陳述の反対のことである。要するに、反事実的条件法によって主張されることは、要求される適切な前提条件の言明が現実と真とみなされることである。そしてこの適切な前提条件は定義されていなければならない。つまり、後件を推理するために前件と連言されるべき条件言明を決めておかねばならない。上例において適切な条件とされる文は、「勢いと活気程度において記憶が想像よりすぐれている」という両者の第二のちがいを述べた文である。そして、この言明は第一部第三節で定義されていた。そこで、この文の言明は真とみなされる。このように、記憶と想像の第二のちがいは、引用した二つめの例外文における反事実的条件文の主張する根拠の点からみても正当化される。したがって、記憶と想像における第一のちがいの主張については、過去の冒険談を語る男が空想をもてあそぶ場合もあるの

で、なにも言えないが、両者が活気の程度・優劣において区別されるという主張にかぎっては、以上のことから確かだといえる。つぎに、第二の問題に移ろう。この問題は△記憶と想像におけるちがいが勢いと活気の優劣にあるということによって、ヒュームはなにを主張しようとしているのか▽であった。まず、内容を簡明にするためこの問題を二つに分けることにする。第一に、△記憶観念は勢いがよく、いきいきしている▽とはなにを意味するのか、第二に、△想像観念は弱くて淡い▽とはなにを意味するのかがである。第一の件、想像にまさる活気をもつ記憶とというのはつぎのように考えられる。記憶の活き活きしていることは、最初に感じられた単純与件（原印象）が単純観念を介し内印象の領域に呈示されて（関係して）いるのが、はつきりと感じられる、ということを意味する。はつきりと感じられるということは、印象の可感的性質と同様に日常的な次元における、いわば出発点となる認識のことである。これはヒューム哲学を考えるさい非常に重要である。しかも、この可感的性質によって特徴づけられることからは、直接経験によってわれわれにいきいきと感じられるのであるから、主観的事実としてまず確立しないし確定される⁹⁾。直接経験によってわれわれがいきいきと感ずることは、疑われえないことである。直接経験によってわれわれに感じられるものは¹⁰⁾、そのなかに錯覚や見まちがい、聞きちがいなどがあるから、主観的で個別的事実である。このように記憶の活気は、その可感的性質により直接経験が主観的個別的事実なことから確立しているということを示している。

三 想像観念について

ところが、第二の想像観念については問題である。なぜなら、この観念はわれわれにははつきりと感じられないからである。しかも、ヒュームは想像を明確に定義していない。なぜ定義がなされなかったのか。この点は明白であ

る。さきに述べたように、想像の働き一般を定立することから出発する推論はいきいきしていないので無意味である。というのは、想像の働きは、直接われわれに感じられないので、弱くて淡い観念によって構成されているからであった。淡い観念によってなされる推論はどこまでいっても曖昧である。したがって、そのような推論はいきいきとしないで不確実である。さらに、これらの淡い観念は想像という名の特殊観念によって代表されるものである。したがって、想像の働きは想像という名によって理解されているにすぎない。想像が定義されなかったのはこういった理由による。それゆえ、われわれは想像という名によって特徴づけられていることがらを見出す必要がある。つまり、想像の諸観念について説明する必要がある。

では、想像諸観念はどのように形成されるのか。このことをまず検討しよう。すべての観念が原印象からくるように、想像観念もその源をたどれば原印象からくる。しかし、原印象からただちに観念となったもの——印象と関係した観念——が想像観念となるのではない。なぜなら、想像観念は単純観念でないからである。つまり単純観念は原印象からの直接的な関係によって成立する。だから、それは事実と直結している。しかし、想像にはいきいきとした事実がない。想像は或る特定の諸事実に関連していわれるにすぎない。したがって、想像観念は一つの単純観念ではなく単純観念から成る複雑観念である。また、これら複雑観念は、それぞれバラバラにあるのではなく、連想原理により、想像という名の共通テーマで結合している。いかえれば、「想像」というテーマを想定することで、個々の特殊観念の間に類似関係が成立しているのである。たとえば、「私は別世界を想像する」とか「目のまえにある置物の裏側（見えていない部分）を私は想像する」とか「他人の心を想像する」などといわれるとき、個々の事例（別世界・置物の裏側・そのつどの他人の心という特殊諸観念）が、それらに共通することがら（想像という名の一般観念）を想定し、類似関係によって結合されるのである。想定された一般観念が意味をもつためにはそれら個々の特殊観念をつねに伴っていないなければならない。したがって、想像観念は複雑観念である。

四 観念結合の可能性としての想像の働き

想像観念は複雑観念であり、しかも想像は「自由に観念を置き換え、変える」^⑩ことができる。しかも、このことは観念の分離可能性をも意味する。分離可能性とはヒュームによると「異なるものどうしは区別でき、区別できるものどうしは思惟や想像によって分離できる」^⑪ということである。要するに、想像（力）は諸観念をくっつけたりはなしたりすることができるわけである。正確にいえば、それは観念間に関係を成立させることである。このことから、想像には、われわれのもっているすべての観念に関わる可能性があるということが明らかとなる。いいかえれば、すべての観念は想像観念となる可能性をひめているということである。つぎに、その結合可能性がどのようなものであるかを考えてみよう。われわれの持っている単純観念はそれに印象が先行するので有限であるが、その観念の組合せ方は無限にある。たとえば、「あ」から「ん」までの五十種の文字を使ってその組合せを考えるさい、同じ文字を何度使ってもよいとすれば、その組合せ（並べ方）は無限にある。それと同じように観念を何度でも関係づけることは可能であるから、その組合せ方は無限にある。たとえば、「あいあいあい……」という組合せも可能である。しかし、そのほとんどは意味をなさないであろう。ところで、ここにあげた組合せの操作が可能になるのは、ヒュームのいう「哲学的関係」の立場からみた場合である。この立場は、「空想において二観念が恣意的につながっている場合でさえ、両観念を比較するのにふさわしいと考えられるような特殊事情を意味し」、しかも「事物相互の比較を可能にする」^⑫だからこの立場からみることによって、不自然な意味のない繋がりが比較できるのである。（ふだんの日常生活においては——「自然的関係」からみれば——われわれはこの無意味性にも気づかないこともある。）そして、われわれはこの比較によって、観念間の無限にありうる組合せのほとんどが意味をなさないということを見出すのであ

る⁴⁰。したがって、無限の組合せによって想像が影響を及ぼしうる観念結合は弱いものであることがわかる⁴¹。このことから、想像観念がいきいきしていないということとは、はっきりと感じられないという可感性の点だけでなく、意味が不明であるという点をも示していることが明らかである。それゆえ、想像観念において、ことからの意味がどのようなにして明確になるのかということを見なければならぬ。つまり、観念のより強い結合はどのようにして成立するのかをつきに見なければならぬ。

五 観念の連合としての想像の働き

観念の弱い可能的結合から、より強い結合をもたらすものも想像である。これをヒュームは観念の連合（連想）と呼ぶ。この連合を生じる性質には三種類ある。それは、類似関係、近接関係、因果関係である⁴²。「思考過程において観念がたえず変転するさい、或る観念は想像によって類似する観念へとたやすく移る」⁴³が、このとき二観念間に結ばれている関係が類似関係である。類似関係の源は原印象と単純観念との間に成立しているとされる。このことは、先行原理と模写原理から帰結されよう⁴⁴。しかし、観念間の類似関係は印象を伴っていないので、この関係によって連合された諸観念は、単なる想念（*noion*）にすぎず、確信や信念（*belief*）、およびそれらに基づいて下される確定的判断ではない。近接関係によるものも同様である。したがって、単なる想念が信念となるためには、類似関係だけでなく、さらに因果関係をも必要とする。それゆえ、観念連合において重要な意義をもっているのは因果関係である。では、因果関係とはどのようなものであろうか。

六 因果關係と恒常的連接

まず注意しなければならないのは、ヒュームにとつて因果關係は必然的な關係でない、ということである。なぜなら、原因と結果は、それぞれ實在的物事ないし対象を示すものではなく、原因觀念と結果觀念の間にある關係として捉えられるものだからである。そこで、この關係を見い出すため、哲學的關係の立場から当該事物關係を比較すると、因果關係はつぎのようになれる。それは、原因とよばれる事物がそれに類似する・結果とよばれる事物に先行し近接する關係である⁹⁰。しかし、この立場は対象に付随する觀念、われわれが想像において持っている觀念間の繋がりについて言及していない。「われわれが因果性に基づいて推理したりそこから推論を引き出せたりできるのはもっぱら、それが自然的關係であるかぎりにおいてであり、しかも、われわれの觀念間に一つの結合を生じるかぎりにおいてである」⁹¹したがってヒュームは、われわれが本性上有する觀念間の繋がりに言及しながら、自然的關係としての定義を下す。「原因とは、或る事物対象に先行しかつ近接する事来対象であつて、しかも前者と深く結合している。従つて、一方の対象觀念は他方の対象觀念を形成するように心を決定し、また一方の印象はよりいきいきした他方の觀念を思念するように心を決定するのである」⁹²この定義で主張されていることをビリヤードの例で考察しよう⁹³。いまテールボードに白玉と赤玉がある。赤玉めがけキューで白玉を撞いたとき、この白玉は赤玉に向かつて一直線に進む。二つの玉は衝突し、静止していた赤玉がその衝突によって運動を得る。この場合、白玉の運動は原因で赤玉の運動は結果として、衝突の瞬間に運動が伝達されるのを、われわれは知覚することができる。このことからつぎの二つのことが帰結される。第一に、衝突の瞬間には、時間的にも場所の上でも隔たりがないのであるから、原因である白玉の出来事は結果である赤玉の出来事と接しているということである「近接」。第二に、衝突前では、白玉が運動しており

赤玉は静止していたので、白玉の運動は赤玉の運動より先にある。したがって、原因である白玉の運動は結果である赤玉の運動に先行しているということを出来事として知る「原因の時間的先行性」。ところで、この場合の近接と先行性は、白玉と赤玉という事物間の関係であるから、力学的説明がなされているにすぎないといわれよう。——これが哲学的関係として考察される因果関係である。しかしヒュームは、これらの近接と先行性が見い出されるのはわれわれの心のうちにおいてであり、しかもこれは自然的なことであると主張しているのである。なぜなら、原因結果としての各々二球の運動状況は印象を通してわれわれに経験されているからである。さらに、この実験を何度繰り返そうとこれと同じ状況はつねに見い出されることを、われわれは推理できる。だが、このことは因果関係が必然的關係であるということを用いては推定してはならない。なぜなら、これら二球の關係が外的事物としての必然的關係であるとすれば、事物の諸性質が原印象に先立つこととなり、ヒュームの印象が觀念に先立つという先行原理に矛盾するからである。では、つねに同じ状況が見い出されるだろうとわれわれが推理できるのはどうか。これについてヒュームはつぎのようにいっている。「われわれが或る対象の存在から別の対象の存在を推理できるのは『経験』によってのみである。この経験とは以下のような性質である。或る種の対象が過去に存在したという実例をわれわれは思い出す。と同時に、それとは別種の対象がつねにまえの対象に伴い、しかもこの対象に対して近接・継起という一定の秩序で存在していたことを思い出す。……また、過去のあらゆる実例にはそれら対象の恒常的連接があつたことを心に呼び起こす。」^⑨このように、われわれの因果推理を可能にしているのは、近接と原因の先行性だけでなく、過去における恒常的連接という経験なのである。恒常的連接の経験とは、印象を通じて過去に記憶された觀念の繋がりを習慣的反复によつて想起することである。そして、記憶された觀念の繋がりを可能にしているのが想像であることはいままで考察から明らかである。したがって、恒常的連接は記憶の働きの双方をもつてして成立するといえる。しかし、われわれが日常習慣的に行っている動作や言語使用を考えてみる場合、それらの行為は無意識になされてい

る。このとき、過去の恒常的連接を想起・回想しているとはいえない。つまり、そのような行為を無意識に「自動的」に⁽⁸⁾行う習慣がわれわれの本性に備わっているのである。しかも、この習慣がわれわれの心を決定しているのである。したがって、日常生活における自然的状況のもとでは、記憶と想像の固有の働きは明確に区別できないのである。

結 び

観念間の繋がりを可能にするのが想像であることは第四章より明らかである。しかし、観念間の推移を可能にする因果関係にいたっては、恒常的連接が不可欠である。しかもこの恒常的連接は、過去に記憶印象であったものを含んでおり、それを繋げているのは想像であるといえる。なぜなら、過去における各記憶印象は現在では諸観念であり、諸観念は想像において繋がられていたからである。したがって、記憶と想像のちがいが明確に見い出せない理由はここに存するのである。いいかえれば、このことより、記憶と想像の働きは、信念にいたるための因果推理において相補的に関連し合っているということが明らかなのである。さらに、想像の活気の弱さによって、無限にある観念の結合可能性を示唆していたことも重要である。しかし、その重要性は、諸観念の弱い結合という現象的側面にあるのではなく、活気の弱さという可感的性質によって示されている意味的側面にある。つまり、こういった弱い観念間の繋がりが、それだけでは意味をなさず、われわれがそこから信念としての確固たる認識にいたるためには連想原理における因果推理に不可欠な恒常的連接を必要とする、ということであった。そして、この習慣的に反復される恒常的連接によって、諸観念はいきいき感じられると同時に、その内容も意味化されるということであった。

以上の考察から明らかなように、ヒュームは、活気の優劣という可感性の点で記憶と対比させた想像の性格を明示しただけでなく、理性と対置せられる想像概念を因果推理において導き出したことは重要である。また、これを導出

したことにより、習慣という人間本性を見出し出したことは、現実そのものを再考するためにも大いに意義のあることであろう。

註

- (1) cf. *Treatise of Human Nature*, 1739-40, ed. by Selby-Bigge, 1978, oxford, p. 1. 以下 *Treatise* と略。
- (2) cf. *Treatise*, p. 9f.
- (3) cf. *Treatise*, p. 85.
- (4) *ibid.*
- (5) このことは原印象が觀念に先立つという先行原理から帰結される。
- (6) 直接経験によってわれわれに感じられるものは、先行原理から導かれた模写原理によって説明される。この場合の模写原理とは、原印象の感受と同時にそれに対応する単純觀念との類似関係を意味する。しかし、模写された觀念は必ずしもイメージを意味するのではない。拙論『ヒュームの隠された記憶』(哲学研究年報第二十二号)註(6)を参照。
- (7) cf. *Treatise*, p. 17.
- (8) *Treatise*, p. 10.
- (9) *Treatise*, p. 18.
- (10) *Treatise*, p. 13f. ヒュームは哲学的関係と自然的関係をあげる。
- (11) なかにはその組合せがたまたま意味をなしているといわれる場合があるかもしれない。たとえば、「ヤッピー」という最近の流行語を取り上げてみよう。この言葉は文字や音の組合せの点からすれば無意味である。しかし、この言葉を「ラッキ―」や「やったあー」、「ハッピー」という日常の感嘆語や「(元気で)や。っている？」という挨拶言葉に関連させてみると、その意味がはっきりしてくる。つまり、我々の記憶バンクにあるこれらのことばから連想することによって、無意味な文字列「ヤッピー」の意を我々は理解するのである。
- (12) これをヒュームは、想像力に二つある原理のうち「可变的・弱い・不規則な原理」とする。これに對しもう一つの原理とは「永続的・不可抗的・普遍的な原理」である。これらの原理は、想像を理知と對立させて説明するとき有効となる原理である。
- (13) cf. *Treatise*, p. 11.

- (14) *ibid.*
- (15) cf. *Treatise*, p. 5.
- (16) cf. *Treatise*, p. 170.
- (17) *Treatise*, p. 94.
- (18) *Treatise*, p. 170.
- (19) 上の例はホルターの作である『人性論綱要』から借用したものである。cf. An Abstract of A *Treatise of Human Nature*, 1740, p. 11f. [in Selby-Bigge's *Treatise*, p. 649f.]
- (20) *Treatise*, p. 87.
- (21) *Treatise*, p. 93.
- (22) cf. D. G. C. Macnabb, *David Hume*, 1951, archon, p. 61.

——大学院博士課程後期課程——